

■ 生活環境支援系理学療法 11

1061 男性、女性在宅介護者の介護負担感の違い

— Zarit介護負担感評価尺度を用いた性差による比較 —

上村さと美¹⁾²⁾, 秋山純和²⁾

1) 健康科学大学健康科学部理学療法学科, 2) 国際医療福祉大学大学院保健医療学専攻理学療法学分野

key words 介護負担感・男女差・J-ZBI

【目的】在宅要介護者が在宅生活を継続するには介護者の存在が不可欠である。一方、介護者の悩みは、介護における身体的負担ではなく精神的負担であると報告されている。在宅における理学療法が進むなかで理学療法士は対象者だけでなく介護者に対する援助にも視点を置く必要がある。本研究では、介護から生じる精神的な負担感を性差による違いに着目し、各々への精神的支援方法について考察した。

【方法】対象は、訪問看護ステーションを利用している要介護者29名(平均年齢77.6±8.98歳)の主介護者29名(男性7名,女性22名,平均年齢68.6±11.7歳,63.1±13.42歳)とした。女性介護者に対する介護者の属性は男性介護者(配偶者5名,息子2名),女性介護者(配偶者11名,嫁5名,娘6名)であった。介護者に対する介護負担感の測定はZarit caregiver Burden Interview日本語版(J-ZBI)を用い、実際の調査は自記式アンケートとして実施した。分析は、J-ZBIを構成する評価項目全22項目をPersonal strain(PS項目:介護より直接生じる負担感を示す)とRole strain(RS項目:介護による拘束感を示す)に分類し、PS, RS項目に属する項目間の関連性をspearmanの順位相関を用いてPS, RS項目ごとに性に分けて検討を行った。危険率は5%未満とした。

【結果】PS項目は、男性介護者は『要介護者はあなたに頼っていると思いますか』と『自分は今以上にがんばって介護すべきだと思いますか』($r=0.93, p<0.05$), 女性介護者は『介護を誰かに任せたいと思いますか』と『要介護者に対して、どうしたらいいかわからない時がありますか』($r=0.80, p<0.05$)の項目に関係

を認めた。RS項目は、男性介護者は『介護により自分のプライバシーを保てないと思いますか』と『介護により自分の時間が十分にとれないと思いますか』($r=0.86, p<0.05$), 女性介護者は『介護により社会参加の機会は減ったと思いますか』と『家族や友人とつきあいがづらくなっていると思いますか』($r=0.75, p<0.05$)の項目に関係を認めた。

【考察】介護負担感の軽減を図る支援方法は、男性介護者は要介護者から『自分が頼られている』と認識することで負担感が増大する為、認識の改善を図る必要がある。女性介護者は要介護者への具体的対応の支援を図る必要がある。男女介護者に共通する支援は、介護者の自由時間とプライバシーの確保、社会参加の機会の確保と考えられる。

【まとめ】理学療法では対象者本人と介護者に対するADL上の介護方法の指導が含まれているので、介護動作とともに介護者に対する精神的側面も評価、支援を考慮する必要がある。

■ 生活環境支援系理学療法 11

1062 訪問看護ステーションひまわりにおける介護者の介護負担感とその要因について

松本義如¹⁾, 永田光明子¹⁾, 村角祐紀(Ns)¹⁾, 武田芳子(OT)¹⁾, 渡部由香¹⁾, 大木田治夫²⁾, 井口 茂³⁾

1) 訪問看護ステーションひまわり, 2) 長崎北病院, 3) 長崎大学医学部保健学科

key words 介護負担・難病・在宅支援サービス

【はじめに】

当ステーションは神経内科病院を母体とし、重度神経難病患者の在宅療養にも携わっている。介護保険サービスの目的は要介護者のみならず家族支援も含まれ、介護者の介護負担の軽減も重要である。今回、利用者の属性と訪問サービスの利用状況、主介護者の属性と介護負担感を調査し、各項目との関連性について考察したので報告する。

【対象および方法】

当ステーション利用者108名中、本調査に同意し介護保険制度を利用しているCVA群35名、難病群14名、他疾患群13名、計62名を対象とした。調査項目は、要介護者の属性、介護度、寝たきり度判定基準等と訪問サービスの利用状況、主介護者の属性、介護年数等とし、主介護者の介護負担感Zarit介護負担尺度日本語版(以下、J-ZBI)を用いて調査した。疾患別の比較にはKruskal-Wallis検定、各調査項目との関係はSpearmanの順位相関係数を用い検討した。

【結果】

要介護者の平均年齢は76.5歳で難病群が低く、他疾患群は高かった。要介護度は介護4以上が51.6%で他疾患群が最も低く難病群が高かった。寝たきり度はB1以上が64.5%で他疾患群が最も低く難病群が高かった。主介護者は女性が多く、続柄は配偶者が多く、介護年数は平均6.7年で難病群が最も短くCVA群で長かった。サービスの利用は訪問看護で他疾患群76.9%、訪問リハで難病群92.9%、訪問介護で難病群71.4%と最も多く、一月毎の利用時間は訪問看護で難病群19.9時間、訪問リハ

で難病群5.3時間、訪問介護で難病群59.1時間と最も多かった。J-ZBIは平均29.6点で、介護者年齢とに正の相関がみられた。疾患別ではCVA群で寝たきり度、介護年数、訪問看護の利用時間とに負の相関がみられ、介護者年齢とは正の相関がみられた。他疾患群では介護年数、訪問看護の利用時間及び日数とに正の相関がみられ、難病群では関連性はみられなかった。

【考察】

今回の調査結果より要介護者は高齢者が多く、重度障害及び全身状態の管理を必要とする者が多い傾向にあった。介護者は60歳以上の配偶者が多く、介護年数も比較的長かった。訪問サービスの利用は、要介護者の状況を反映し全てで多く、J-ZBIの合計点も比較的強く維持できていたものと思われた。介護負担感との関連性より、CVA群は起居動作やセルフケア等の支援が必要なことが推測され、他疾患群では病状の進行に伴い医学的管理や栄養指導が増加するため訪問看護及び訪問介護の必要性が高くなることが考えられた。難病群ではJ-ZBIとの関連性はみられなかったが、短期間で生命の危機に直結することによる介護者の不安は大きく、より詳細な検討が必要であろう。

従って、各訪問サービスの実施に際しては、要介護者の障害及び全身症状の把握に基づくケアとともに、状況の変化に即した介護者への対応も不可欠であることを認識できた。